

18 世紀 ドイツ の 文 学 的 状 況 (2)

— 生 の 理 想 —

藤 本 正 幸

Der literarische Zustand des 18. Jahrhunderts Deutschland (2)

— das Ideal des Lebens —

Masayuki FUJIMOTO

Das 18. Jahrhundert wurde die Geburtszeit des modernen Menschen. Die Aufklärung pflanzte dem deutschen Bürgertum das Selbstbewußtsein des kritischen, analytischen Verstandes ein und weckte die Verselbständigkeit. Die Vernunft regulierte das ganze Lebensgefühl und unterwarf sich die Leidenschaften und die Phantasie. Diese Bewegung ergriff auch die Poesie. Der von innen durch das moralische Gefühl bestimmte Mensch wurde ihr Ideal. Die Zeit als Sturm und Drang war im allgemeine von den siebziger Jahren bis zur Wandlung Goethes und Schillers. In Frankreich leitete diese Bewegung die große Revolution ein, in Deutschland aber sich in der Kunst entlud. Eine rebellische Jugend setzte sich zu der Vernunft der Aufklärung in Widerspruch und behauptete statt Vernunft die freine Willkür, statt Moral vitale Leidenschaften, statt Form den genialen Überschwang. Obwohl der Sturm und Drang in vielen Hinsicht als die radikalere Fortführung der Aufklärung zu betrachten ist, stand er im ganzen jedoch in Widerspruch zu ihrem Geist und wurde zur Zeit der Vorbereitung der deutschen klassischen Dichtung.

1

Nein; sie wird kommen, sie wird gewiß kommen, die Zeit der Vollendung, da der Mensch, je überzeugter sein Verstand einer immer bessern Zukunft sich fühlet, von dieser Zukunft gleichwohl Bewegungsgründe zu seinen Handlungen zu erborgen, nicht nötig haben wird; da er das Gute tun wird, weil es das Gute ist, nicht weil willkürliche Belohnungen darauf gesetzt sind, die seinen flatterhaften Blick ehemals bloß heften und stärken sollten, die innern bessern Belohnungen desselben zu erkennen.¹⁾

1) Lessing: Die Erziehung des Menschengeschlechts -85-

否、それらは来るであろう。必らず来るであろう。完成の時期が。人間の理性がよりよき未来を信じれば信じるほど、人間は自らの行為の動機をこの未来から借りる必要がなくなるようになるであろう。人間は善を善なる故に行ない、善に報償が添えられているから行なうということとはなくなるであろう。その報償はかつては人間の移ろいやすい視線を引き留め、善の内的なよりよい報償を強く認めしめることになっていたのである。

1780年、レッシングは「人類の教育」において生活感情の核心を表明している。現在の瞬間を未来の瞬間へと続く一つの手段として考え、われわれの感情を不確実な未来へと導く彼岸本位の人生観に対して、レッシングを充たしていたものは生活の一日一日の独立の価値である。善のために善を行ない、研究そのもののために真理を求め、抽象的な目標には目もくれず、人間そのものの内面の生ける成長に注意を払う生の理想である。この啓蒙主義の思想は各国において各々違った一面を持っていた。フランスでは経験的懐疑主義と政治的・社会的啓蒙主義が結びつき、来たるべき大革命の準備期となった。しかし、ドイツにおいては、フランスのように急進的な政治思想にまでは発展しなかった。小国分立の体制は封建的な権力と制度を固定化させていたのである。その結果、市民階級の発展の歩みはきわめて遅れていた。フランスにおいて新しい政治的・社会的時代の出発を招来したものが、このドイツでは芸術の世界にのみ開花することになる。つまり、市民階級は、啓蒙主義の理性によって伝統や因襲にとらわれない自由を手に入れていたにもかかわらず、それはあくまで内面的な自由でしかなかった。そのため、この革命的傾向をはらむ啓蒙主義の思想も、市民階級の現実的な解決方法にはならず、観念的なものへと結びついたのである。このような状況の中、主に青年層において、啓蒙主義思潮に対する疑惑性が漸次現われてくるのである。啓蒙主義の功績は何よりも中世以来の伝統や因襲に頼る認識方法から人間を解放し、理性を唯一の認識の根源として確立したことである。しかし、このような合理的世界観にふさわしい文学がその頂点に達しようとした時、その反動として新しい動きが現われてきた。そして、それは非合理主義の形態をとまっていたのである。

„Alle Zufriedenheit, die wir an irgendeinem Kunstschoenen empfinden, hängt davon ab, daß Regel und Maß beobachtet sei; unser Behagen wird nur durch Proportion bewirkt. Ist hieran Mangel, so mag man noch so viel äußere Zierat anwenden, Schönheit und Gefälligkeit, die ihnen innerlich fehlen, wird nicht ersetzt; ja man kann sagen, daß ihre Häßlichkeit nur verhaßter und unerträglicher wird, wenn man die

äußeren Zieraten durch Reichtum der Arbeit oder der Materie steigert.²⁾

——我々が芸術美に感じるすべての満足は、規則と節度が守られていることに依存している。それに対する我々の快感は、ひたすら均衡によって惹起される。もし均衡が欠けるならば、いかに多くの外面的な装飾を用いようとも、内面に欠如している美や快適さを補うことはできない。それどころか、外部の装飾を華美な細工や素材によって高めるにつれて、その醜さはいちだんと不快で耐えがたいものになると言えよう。

この主張をさらに押し進めるために敢えて言うが、節度と均衡から生じる美は、驚嘆を得るためにけっして高価な素材や精巧な細工を必要としない。美は、むしろ素材と取り扱いの煩雑さや混乱のうちから顔をのぞかせて輝き、人々の心に触れるのである。——

これはゲーテの論文「ドイツ建築について」の一節である。1770—71年のシュトラウスブルク時代に訪れたゴシック大寺院の強烈な印象を記したものである。16C以来ゴシック建築は秩序のない、不自然な、矛盾の多いものとしてドイツではみなされていたのである。しかしゲーテの眼はこれを秩序整然たる、極めて自然な、極めて調和的なものとして見ているのである。節度や均衡よりも、むしろ個性的なものにこそ、真の芸術性を見るという新しい世界観の誕生である。

2

1770年代から80年にかけて、ドイツ文学には合理主義から非合理主義へと、一つの新しい局面が現われる。青年期のゲーテ、シラーを中心とした若い作家達は文学の革新を叫んだ。この運動はシュトルム・ウント・ドラング (Sturm und Drang) とよばれ、クリンガー (Friedrich Maximilian von Klinger) の同名の戯曲に由来したものである。彼らはもはや感情や衝動を理性で抑えようとはせず、秩序の代りに自然を、形式の代りに力と天才的充溢を求め、いかなる束縛や規則をも認めない創造的自由を主張したのである。シュトルム・ウント・ドラングは、天才時代 (Geniezeit) とよばれるように、彼らは自らを天才と呼称し、真に偉大で創造的な作品は、天才の自由な仕事の中から生まれると信じていた。

2) Goethe: Von deutscher Baukunst 1823

Um diese Behauptung noch weiter zu treiben, sag' ich, daß die Schönheit, welche aus Maß und Proportion entspringt, keineswegs kostbarer Materien und zierlicher Arbeit bedarf, um Bewunderung zu erlangen; sie glänzt vielmehr und macht sich fühlbar, hervorblickend aus dem Wüste und der Verworfenheit des Stoffes und der Behandlung.

Es war noch lange hin bis zu der Zeit, wo ausgesprochen werden konnte: daß Genie diejenige Kraft des Menschen sei, welche, durch Handeln und Tun, Gesetz und Regel gibt. Damals manifestierte sich nur, indem es die vorhandenen Gesetze überschritt, die eingeführten Regeln umwarf und sich für grenzenlos erklärte.³⁾

——天才とは、その行為によって、法則と規範とを与える人間の力である、と表明することが出来る時代には、まだ遠かった、当時であって、天才とは、現存する法規をふみ破り、誰もが認めている規則をくつがえし、自分が何ものにも拘束されない存在であると宣言することによってのみ、表明されるものとされていた。——

後年、ゲーテはいくらかの反省を込め青年時代をふり返っているが、この天才概念はドイツ文学に、感情の解放と生の充実感をもたらしたのである。

Ich war dazu gelangt, das mir inwohnende dichterische Talent ganz als Natur zu betrachten, um so mehr, als ich darauf gewiesen war, die äußere Natur als den Gegenstand desselben anzusehen. Die Ausübung dieser Dichtergabe konnte zwar durch Veranlassung erregt und bestimmt werden; aber am freudigsten und reichlichsten trat sie unwillkürlich, ja wider Willen hervor.⁴⁾

——私は私のうちにある詩的才能を即自然とみなすようになっていた。私は外的な自然を私の詩的才能の対象としてみなすよう教え込まれていただけに、なおさらそうであった。このような詩的才能の出現は、なるほど何らかの原因によって呼び起こされ規定されることもあったが、最も生き生きと豊かに流露するのは、無意識のうちに、むしろ意思に反して現われてくる場合である。——

グンドルフによると、ゲーテ自身のライプツィヒ時代の抒情詩も含めて、以前の抒情詩は、与えられた言語的芸術手段によって、詩人の感情や情熱や衝動を、可能な限り、明晰に、完結した、統一ある、把握し得る形態として、表現しようと試みた。

これに対して、ゲーテの新しい抒情詩は、眼の前にただようもの、ゆらめくもの、形のない雰囲気そのもの、心に沸きたつものを直接言語化しようとした。それらは彼にとっては同時に

3) Goethe: Dichtung und Wahrheit Neunzehntes Buch s. 837

4) Goethe: Dichtung und Wahrheit Sechzehntes Buch s. 748

内容であり形式そのものであった。新しい抒情詩には、一方に詩人がいて、他方に歌われる対象があるという従来の詩の関係はもはやみられない。歌われる対象そのものが詩人の心の中で溶け合い、混り合い、主体化され、みずから言語になり、リズムになり、色彩となるのだ。かつての詩人達が自らの際限なき情熱を一つの限定された形姿の中に閉じ込め、人間の非合理的な感情や衝動すら抑制してしまっていたのに対しゲーテは、いきいきとした人間の清新な生の律動をも描くことができた。彼にとって対象は、もはや一つの存在ではない、瞬間瞬間に移り変わる生成であり、運動であり、発展であるのだ。そして、それ自体が旋律に、音声に言葉になったのである。

グンドルフは、ゲーテの詩「湖上にて」(Auf dem See) において、用いられている現在分詞について言及している。

Auf der Welle blinken	日光は水なわのうえに
Tausend schwebende Sterne,	数知れぬ星くずのようにくだけ
Weiche Nebel trinken	ほのかな狭霧に
Rings die türmende Ferne;	^{まわり} 四周の山々はかすみ
Morgenwind umflügelt	朝かぜをみたす
Die beschattete Bucht,	みどりの岸べと
Und im See bespiegelt	入江のよどみがうつす
Sich die reifende Frucht.	熟れ麦のさわやかな黄色

(大山定一訳)

この「湖上にて」の三節においても、schwebende Sterne, türmende Ferne, reifende Frucht の三ヶ所に用いられ、それも副文章の短縮としてではなく、純粹に形容詞として用いている。現在分詞は、本来、継続の意味を持つもので、これを形容詞化することにより、ゲーテは一つの存在を、刻々と移りかわる一つの運動としてとらえている。そして、動詞はすべて現在形である。湖上をすべる小舟の上から、眼の前を去来する自然の瞬間瞬間を描き、詩を偶然に委ねている。普遍的な自然を、既存の言葉で再現しようとはしない。ゲーテにとって新しい魂の体験が詩的価値を持つのである。グンドルフは述べる。ゲーテはドイツ語に新たな力、エネルギーを与え、飛ぶことを教えた。以前、詩人達は事物に対して語りかけるばかりであったが、ゲーテは事物そのものに語ることを教えた。この時期、ドイツ語の表現形態に新しい一頁が加えられたのである。

3

Was die Fülle dieser wenigen Wochen betrifft, welche wir zusammen lebten, kann ich wohl sagen, daß alles, was Herder nachher allmählich ausgeführt hat, im Keim angedeutet ward und daß ich dadurch in die glückliche Lage geriet, alles, was ich bisher gedacht, gelernt, mir zugeeignet hatte, zu komplettieren, an ein Höheres anzuknüpfen, zu erweitern.⁵⁾

——私たちがいっしょに暮したこの数週間の充実していたことについては、こういってよいであろう。すなわち、ヘルダーがその後漸次完成していったものはすべて萌芽として予示されていたのであり、一方私はこれによっていままで考え、学び、自分の身につけてきたものをことごとく完全なものとし、より高いものに結びつけ、拡大することが出来るという恵まれた状況にはいれたのである。——

ゲーテはヘルダーとの出会いを述べている。1770年9月ヘルダーはシュトラウスブルクにやってきた。ヘルダーとゲーテとの出会いは、シュトルム・ウント・ドラングの運動のみならず、以後のドイツの文学にとって画期的な出来事であった。ヘルダーは、その師ハーマン (Johann Georg Harmann) とともに、ゲーテに強く影響を与え、シュトルム・ウント・ドラング運動の理論的指導者となった。ハーマンは、人間を理性的存在としてとらえず、感性と感情の存在としてとらえ、反啓蒙主義の立場から理性に対して感情を主張したのである。ゲーテは「詩と真実」においてハーマンの理解を次のように述べている。

Alles, was der Mensch zu leisten unternimmt, es werde nun durch Tat oder Wort oder sonst hervorgebracht, muß aus sämtlichen vereinigten Kräften entspringen: alles Vereinzelte ist verwerflich.⁶⁾

——およそ人間が成就しようと企てるものは、たとえそれが行為によって生まれようとも、言葉によって、あるいはその他のものによって生まれようとも、あらゆる力が統一されたところから、生まれなければならない、すべて離ればなれなものは排すべきもののだ。——

5) Goethe: Dichtung und Wahrheit Zehntes Buch s. 455

6) Goethe: Dichtung und Wahrheit Zwöltes Buch s. 572

人間は感情的な存在である。感情の中に生命の意義を認め、全体を統一した形で感じ想像し思索し、言葉で語るのである。ヘルダーは、ハーマンの非合理主義を受けつぎ、発展させ、ゲーテに伝えた。

ヘルダーは当時すでに批評家として活動を始めていた。批評家としてのレッシングが、理性に基づく普遍的法則に基礎をおいていたのに対し、ヘルダーは、創造的な生ける力を力説した。彼は各個体の中から湧きでる個別的なもの、特殊なものをも肯定し、その本質を見きわめようとした。つまり、レッシングは、空間における存在、理性による恒常不変な法則を求めたのに対し、彼は時間における生成、絶えざる発展、変形を探ろうとしたのである。そして、その結果、詩は初めて理性的なるものから離れ、生の充実を獲得することが出来ると確信していたのである。

個別的なるもの、根源的なものの探究によって初めて全体が把握することが出来る、とする彼は、民族個有の詩歌、民衆文学、民謡に眼を向けた。すべてこれらは、理性から生まれたものではなく、民衆の感情の中から生まれたもので、それ自身生の躍動に満ちあふれているとした。ヘルダーは「詩歌は人類の母語である」というハーマンの命題に導かれ、言語と民族の魂の関連を探った。彼は古代スコットランドのオシアン之歌、そして近代においてはシェークスピアの作品に傾倒する。

War der Mensch göttlichen Ursprungs, so war es ja auch die Sprache selbst, und war der Mensch, in dem Umkreis der Natur betrachtet, ein natürliches Wesen, so war die Sprache gleichfalls natürlich.⁷⁾

——人間が神的起源を有するものだったら、事実、言語そのものも神に由来したのであり、もし人間を自然の大きな輪の中に入れて考察し、人間は自然的存在であるとするならば、言語も同様に自然の所産である。——

シュトラウスブルクにおいて、ヘルダーの言語の起源に関する論文を読んだ印象を、ゲーテは詩と真実において述べている。ヘルダーの論文は、どのようにして人間が人間として、自分自身の力によってある言語をもちうるようになるか、またもつはずであるかを示そうとしたものであった。ゲーテはこの論文に根拠のある判断を下せなかったが、興味を持ち強い刺激をうけている。ヘルダーは神と自然について語るのである。ゲーテがライプツィヒ時代、既に予感していた自然、それはヘルダーによってより包括的な概念となった。

7) Goethe: Dichtung und Wahrheit Zehntes Buch s. 453

Natur! Wir sind von ihr umgeben und umschlungen-unvermögend, aus ihr herauszutreten, und unvermögend, tiefer in sie hineinzukommen. Ungebeten und ungewarnt nimmt sie uns in den Kreislauf ihres Tanzes auf und treibt sich mit uns fort, bis wir ermüdet sind ihrem Arme entfallen.

Sie schafft ewig neue Gestalten; was da ist, war noch nie, was war, kommt nicht wieder—alles ist neu, und doch immer das Alte.

Wir leben mitten in ihr und sind ihr fremde. Sie spricht unaufhörlich mit uns und verrät uns ihr Geheimnis nicht. Wir wirken beständig auf sie und haben doch keine Gewalt über sie.⁸⁾

——自然！我々はそれに囲まれ、その中に包みこまれている——そこから脱け出すことは不可能で、その中へもっと深く入ることも許されない。だしぬけに無警告に、自然は我々をその踊りの輪の中へ引き入れ、我々が疲労困憊してその腕からすべり落ちるまで、踊りつづける。自然は永遠に新しい諸々の形態を創る。かつてあったものが再びよみがえることはない。——すべては新しく、しかもつねに古いものである。——我々は自然のただ中に生きながら、それを知ることはない。自然は絶えず我々に語りかけるが、その秘密を打ちあけることはしない。我々は常に自然に働きかけ、しかもそれを支配する力を持たない。——

これはゲーテの「自然—断章—」の一部である。ゲーテ自らが書き残したこの「箴言的論文『自然』への注釈」によると、上記の断章は1780年代に書かれたものである。しかし、本人も述べているように、シュトルム・ウント・ドラング期のゲーテの自然感と一致したものである。この背後にはシェイクスピアの自然がある。シェイクスピアの自然は、ヘルダーを通じて、ゲーテの心の中でより一層豊かなものとなった。

4

Und ich rufe: Natur! Natur! nichts so Natur als Shakespeares Menschen!
Und was will sich unser Jahrhundert unterstehen, von Natur zu urteilen? Wo sollten wir sie her kennen, die wir von Jugend auf alles geschnürt und geziert an uns fühlen und an andern sehen. Ich schäme mich oft vor Shakespearen, denn es kommt man-

8) Goethe: Die Natur Fragment

chmal vor, daß ich beim ersten Blick denke, das hätt ich anders gemacht! Hintendrein erkenn ich, daß ich ein armer Sünder bin, daß aus Shakespearen die Natur weissagt und daß meine Menschen Seifenblasen sind, von Romanengrillen aufgetrieben.⁹⁾

——そこで私は叫びます。自然だ。自然だ。シェークスピアの人間にもまして自然なものはない、と。——それにしても、我々の世紀が自然について判断を下そうとするとは何と傲慢な態度でしょうか。我々は若い時から、自然がすべて縛りあげられ飾り立てられているのをわが身に感じ、他の人々の上にも見ているというのに、どうして自然を知っているなどといえるのでしょうか。私はよくシェークスピアに対して恥しく思うことがあります。というのも、はじめて見た時の印象では、自分ならこうは書かなかったであろうなど思うことが一度ならずあるのですが、あとになって自分はなんと情けない男だ、シェークスピアの語る言葉は自然の告知で、それに比べると私などはたわいもない空想の世界から飛び出したシャボン玉にすぎない、ということに気がつくからです。——

ゲーテは1771年起草の演説「シェイクスピア記念日によせて」において、彼がいかに感激したかを述べている。彼はシェイクスピアの作品に最高の自然、より一層根源的自然をみた。ここではもはや自然と芸術の分裂はなく、自然そのものが芸術となり存在するのをみた。——私は最初の作品を読みおえると、盲目が一瞬、奇蹟の手で開眼させられたかのような気がした。私の存在が無限に拡大されたことをきわめて生き生きと実感した。——私は自由な空気の中へ飛び出した。私は初めて自分に生きた手足があることを認識した。——シェイクスピアの自然、情熱、自由奔放な形式は、青年期のゲーテに多大の影響を与えている。

ヘルダーを通してゲーテへと伝った時代の新しい精神が、ゲーテのシュトルム・ウント・ドラング期の作品においていかに開花したかをみてみたい。

ゲーテの「若きヴェルテルの悩み」(Die Leiden des jungen Werthers) は1774年に発表された。この書簡体の小説には、かつて啓蒙主義期にはみられない人間の感情の解放とともに、自然への讃歌がいくどとなく描かれている。背景になったヴェツラルでのシャルロッテ・ブッフや友人の自殺という、重苦しい体験が、この田園地帯の美しい自然の中で、解放され、ヴェルテルの孤独を和らげた。彼は自然の中でよみがえった。——若々しい春の季節が、こごえがちな僕の心を一杯にみなぎらせ、暖ためてくれる。——そこで僕は黄金虫となって、芳醇な花の

9) Goethe: Zum Shakespeares-Tag

香りの海の中を這いまわり、そこに自分の食べものを見つけないと思っている。——5月4日
第一書簡にて、はやくも彼は、感激の言葉を放っている。

——胸一杯に晴朗な気分がみなぎっている。かぐわしい香を含む春の朝の大気を思う存分吸い込む時のようだ。この辺りの風景は、まるでぼくみたいな人間のためにあるらしく、ここでこそ一人ぼっちで自分の生活を楽しめる。——ぼくは、我々を自分の姿に似せて創った全能の神の存在を感じる。永遠の歓喜の中に我々を漂わせながら、支えて下さる神の愛の息吹を感じる。——そんな時にひたすら願いを込めて考えるのだ。これが絵に再現できたら、ぼくの内部にみなぎっているこの生気をそのまま紙に移すことができれば、自分の魂が永遠の神の鏡となり、画面がこの魂の画面になれば、と。ところが友よ。ぼくにはできない。ぼくは余りに壮麗な自然の現象に押しひしがれてしまう。——(5月10日)

——まわりの生命のうごめきに誘われて地面に眼を移すと、ぼくの立つ堅い崖にまで栄養を求めて伸びてゆく苔と、不毛な砂の上にまで生えている灌木が、秘かに燃える自然の神聖な生命の力を教えてくれる。これらすべてを、ぼくは胸を熱くし抱きとめ、その無限の充溢の中に溶け込んだ。そして無尽蔵の世界の様々なすばらしい形姿が、ぼくの魂の中で躍動した。——ぼくの心を徐々に侵食してゆくのは、自然の根源にひそむ、すべてを食い尽くす力だ。自然が創り出すものは、その周囲のものも、自分自身をも破滅せずにはおかぬ。ぼくはおびえながらよるめき歩く！あるのは天と地と、ものを織りなす力だ！眼に見えるのはただ、永遠に呑み込み、永遠に反芻している途方もない怪物だ。——(8月18日)

ゲーテ以前にあっては、自然は一般に神の被造物として、静止するもの、完成のとれたものとして考えられていた。しかしゲーテの自然は永遠の生成であり、無限の運動である。そして、この自然は外部に存在するのみならず、人間の魂の中にも存在する。ここには「神即自然」を唱えたスピノザの影響がみられる。「自然の中に神を、神の中に自然を見る」*Gott in der Natur, die Natur in Gott zu sehen* ゲーテの言葉である。

——自然はそれだけで充分豊かであり、自然はそれだけで偉大な芸術家となる。規則というものも諸々の利点を持つ。市民社会においても、ほぼ同じ点を指摘することができる。規則に従って形成された人間は、趣味の悪い粗悪なものは作り出しはしない。——ところが一方では規則というものは、人がなんといいおうと、自然の真の感情、自然の真の表現を破壊することになるのだ。——(5月26日)

自然は永遠の、必然的な、神自身でさえなら変更することのできない神的な法則によって働いている。この自然の尊重は当然理性的な規則によって縛ることはできない。ゲーテはいささかのわだかまりもなく、直接自然と接し、一体となり溶け込むのである。そこには、規則や秩序などの存在する余地はない。知覚できるものはすべて心的なものであり、心的なものはすべて知覚できるのだというゲーテの自然観は、その作品に律動的な表現と、生のリズムを生み出すことが出来たのである。

啓蒙主義の理性に対し、自由な発想を求めたこのシュトルム・ウント・ドラングの運動も70年代半ばになるとはやくも退潮の兆しをみせはじめた。ドイツの特殊な社会事情から、単なる文学運動であったこと、社会的基盤をもたない青年層による、余りにも主観主義的な運動であったことがその原因としてあげられる。しかし、このシュトルム・ウント・ドラングの自由な生の理想、清新な自然観は、以後のドイツ文学に斬新な息吹を与えたのである。

Literatur

Goethes Werke Hamburger Ausgabe in 14 Bänden

Sturm und Drang hrsg. von Manfred Wacker

Wilhelm Dilthey: Das Erlebnis und die Dichtung, Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen

Fritz Martini: Deutsche Literaturgeschichte Von den Anfängen bis zur Gegenwart

Emil Staiger: Goethe Atlantis Verlag

Goethe Dichtung und Wahrheit I II III Insel

ゲーテ全集 潮出版社

若きゲーテ グンドルフ著、小口 優訳、未来社刊